



ピクタインダオン

(おさみがりにぼし)

第 32 号

発行日 2021年9月1日

発行人 矢代 しず

秋田市御野橋7-1-29-305

コマクサ

黒々とした大焼砂おおやけすなの坂に張られたロープが

強風にもまれて撓んでいる

火山礫に覆われた山肌に

薄紅色の花

不毛の乾ききつた地でも

艶やかなコマクサが

張りつくように 点々と

かすかな明かりをともしている

靄の海のなか ふと近間に目をやると

登山客の置いた慈しみの小石に囲まれた

思いがけない白のコマクサ

ひんやりとした冷気のなか

ひっそりと

膨らんだたがいの花卉を くつつけて

*秋田駒ヶ岳にて

夢魔 I

珍しく

定時に退庁できると

腕時計に目を落とした

瞬間

九階建てのビルを突き上げる

激しい揺れ

整理棚が倒れ

書類が散乱

ブラインドが波打ち

椅子が床を泳ぐ

またしても

強い揺れ

蓄積された巨大なエネルギーは

↖

夢魔 II

お盆が一週間後に迫った

暑熱の昼下がり

一艘の渡し船が

ゆるりと川を下っている

乗客は五人

涼やかな若い女

長い金髪の若者

樟脳が臭う老婆

太った中年の男

浴衣姿のわたし

船頭の舟唄を聞きながら

みなくつろいでいる

時折

↖

地面を揺さぶり
直立する壁を裂く

ビルは倒壊した

四階にいた

わたしは

いま

崩れ落ちた瓦礫の

隙間にできた狭い空間にいる

窮屈な穴蔵は

暗闇の重さで

湿った土の臭いが立ちこめている

なにも見えない

なにも聞こえない

不気味な沈黙に静まりかえっている

時間感覚はなく

↖

川風にさざ波がたち

船縁に手をかける

若い女

アシが生い茂る岸辺をすぎると

川幅が狭くなった

速い流れに青ざめた

女は船酔いをし

次の船着き場でおりた

残った四人は

だれともなしに身の上話をはじめた

先に口をきつたのは老婆

息子を亡くし

孤独の身

妹のところを身を寄せようと

思い切つて出てきたという

金髪の若者は

↖

一分が

一時間にも感じられる

苦い時間が

震える心にしたたり落ち

ぶ厚い壁で囲みこむ

今頃は

夜を徹しての搜索が

つづけられているだろう

人命救助の

タイムリミットは

七十二時間

生存は絶望と

救出活動が打ち切られるのでは――

だが

わたしは

確かに

生きて

↖

屈託のない笑顔で

ただ遠くへ行きたいのだという

にわかに空が暗くなり

船頭は雲行きをうかがっている

そのとき

中年の男の顔が引きつった

川面に何かを見た

男の背中がわなないている

川をのぞき込んだ

若者の金糸を束ねた髪が乱れる

掴まって！

船頭が荒々しい声で叫ぶ

船は

右に左に

踊ったり跳ねたり

↖

ここにいる

助けを求め

声は

だれにも届かない

生への執着が

不透明さを増して

しぼんでいく

痩せていく魂を立たせるには

微笑んだ日の記憶をよみがえらせるしかない

雨上がりの青の静寂のような 明るさ

とぼる灯の赤の記憶のような 温かさ

零れる露の緑の沈黙のような 優しさ

だれかに聞きとどけられるように

祈りのことばを反芻する

やがて

↖

水の意のまま

あつ

りんどういろ
竜胆色の巨大な魚！

鋭い目

特大の口

光る腹

太い尻尾

銀色の鱗

魚が急に浮かびあがった

瞬間

中年の男が

水に引きこまれた

男は水に浮き沈み

度胆をぬかれた老婆は

恐怖の怪魚におののいている

↖

立ち止まる

声

おゝい

心奥に

一条の光

手探りで声を捜す

あなたゝ

ゆくりなくも耳にしたのは

聞き慣れた

妻の声

夢魔^{むま}が遠のくと

次第に

緊張がほぐれ

↖

若者は長い棒で

男を救助

わたしは水を吐かせ

背中をやさしくさする

額のほくろ

凜とした鼻

眉間の浅傷

男は

いつもの見馴れた顔になった

あなた！

夢魔^{むま}が遠のくと

次第に

緊張がほぐれ

↖

はじめて
涙があふれた

はじめて
涙があふれた

人と共存かゝ

①

【A】

渋滞で

ノロノロ運転

運転席側の

歩道を小走りに走る

銀鼠色の物体

ナニ……？

なんと

カモシカ！

こんな街中で散策？

太い針のような体毛

野生のたくましい風貌

おゝい どこ行くの？

【B】

明田富士の頂上付近で

カモシカと出会った

逃げる様子もなく

超かわいい！

フサフサの白い毛

くりくりした目

人間なら

美形のモデル

素敵な一日になる

予感

②

今年

はじめての

姿なき

ウグイスの鳴き声

感受をくすぐる

うら若き声

③

前の車が

右へ 左へ

蛇行運転

寝てるネ!

車間距離をとって

安全運転

④

友人が

階下の老女から

火の言葉の集中攻撃を受けた

あんたでしょ!!

上から一日中走る音がして

五月から眠れない

うるさい 静かにして!!

血圧も高くなるし

頭も痛い……

しゃべるしゃべるしゃべるしゃべる

激しい思い込みはどこから?

そういえば

あの部屋は

変死した女性の部屋という

⑤

登山で

はじめて出くわした

小動物の死骸

たつた今

襲われ

腹を裂かれた

とわかる

生々しい

鮮血

脚はひらき

降参の

仰臥のかたち

靴音

話し声

鈴の音

で

察知したのだろう

襲った動物はいない

獲物を残して

消えるはずはない

すぐ

そこに

隠れているはず！

ホイッスルを鳴らす

「熊出没注意」

の看板が目飛びこんできた

人の入らない

深山の

クモの巣だらけの

山道

マダニにも刺された

もう

この山には来ない!!
と決めた

⑥

山の中腹で
へばってしまった

アミノプロテクト3600を
飲もうとして

地面にこぼしちゃった

甘い匂いに

山蟻が集まってきた

その後

蟻は

筋肉隆々となったかな?

⑦

白睫毛をぬく

が

なかなか

ぬけない!

一週間の格闘の末

やっと

ぬけた

けど

ぬき損なって

不揃いの睫毛

【ご案内】

第九回 「ピッタの会」勉強会

講師に成田豊人氏をお迎えし、左記の通り勉強会を開催いたします。演題は、「詩『日光写真』が出来るまで」です。

質問コーナーを設ける予定です。ご参加をお待ちしております。

日時 十月三日(日)

時間 午後一時～三時半 無料

場所 あきた文学資料館

申込 参加希望者は、九月二十七日(月)までに、矢代レイにご連絡ください。

なお、資料準備のため、必ずお申し込みください。

☎ 090 - 1935 - 1180

【あとがき】

東京オリンピックが終わった。暑熱の中のレースでもあり、番狂わせに同情したり、意外なレース展開に強く心を打たれた。

卓球男子団体戦は、たぶん無理だろうとテレビを消した。その日の夕方、銅メダルを取ったことを知った。水谷選手はチームの要。丹羽・張本両選手もやるべきことをしつかり果たした。そのまとまりが功を奏したのだと思う。

それにしても日本選手は強くなった！ フィジカル・メンタル面での鍛練が、外国人に引けをとらない強い選手に導いた。努力の賜物である。

“好きこそ物の上手なれ”と諺にあるが、好きならばこそ極められる。オリンピック選手に限らず、心と技を磨くことが不可欠。

詩も、また……。

